公益財団法人 http://www.jkcf.or.jp

日韓文化交流基金NEWS

No.85 2018.3.26

Contents

1 日韓パートナーシップ宣言から20年の節目の年に
• 日韓パートナーシップ宣言から20年の節目の年に
2-3 青少年交流事業
• 広がりを見せる青少年交流事業―
全国にまかれた交流の種が、芽を出しています。
4 交流エッセイ
• 相互理解に向けた日本語教育と交流活動のこれから
5 歴史家会議
• 第17回日韓歴史家会議
「東アジアの平和思想とその実践―歴史的考察」
6-7 助成・公募事業
• 「空飛ぶ車いす」千台を繋いだ人と人―ついに青瓦台も
• 東京都市大学と韓国・江原大学校との研究・文化における国際交流
8-9 フェロー研究紹介
• 中堅企業の成長と戦略に関する日韓比較
10-11 事業報告・住所変更
• 日韓文化交流基金事業報告
• 町名変更に伴う住所の変更について
12 賛助会員案内
• 日韓文化交流基金　賛助会員制度の御案内

日韓パートナーシップ宣言から20年の節目の年に

「日韓共同宣言―21世紀に向けたあらたな日韓パートナーシップ―」の発表から、今年で20年となります。

この宣言は、1998年10月に当時の小渕恵三総理と金大中大統領との間で行われた首脳会談の結果出されたものです。その中で、両首脳は20世紀を締めくくり、21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップを目指すとの決意を表明した他、過去の歴史について小渕総理は反省とお詫びを述べ、金大中大統領は過去を乗り越えて和解と協力の重要性を強調したことの意義は重要です。

同時に両首脳は政治、経済、文化の各分野において、より高次元の協力関係を進めることに合意しました。

当基金の事業に関わるものとしては民間識者間の共同研究、高校生等の交流事業があります。

民間識者間の共同研究のひとつとして、1999年度に日韓文化交流会議（韓国側：韓日文化交流会議）が発足しました。同会議は3期にわたって協議し、2012年5月に最終報告書を提出しました。

高校生等を対象にした交流事業では、1999年度より訪日団が、また翌年度より訪韓団がそれぞれ始まりました。これまで、4万人を超す両国の青少年が交流してきました。さらに姉妹校間での交流に発展するなどの広がりも見せています。

またこの間、韓国では、日本の音楽や映画といった大衆文化の段階的開放政策が打ち出された他、2002年のサッカーワールドカップの日韓共同開催、「冬のソナタ」に代表される日本での韓流ブームといった流れの中で、さらに2017年には韓国からの訪日旅行者数が過去最高を記録するなど、両国の交流は質量とも20年前とは大きく変化しています。

当基金では日韓両国の交流の姿や両国をとりまく環境が大きく変化する中においても、「出会い」や「交わり」がもたらしてくれる喜びや感動を、より多くの若者に体験してもらうことができるように努めてまいります。

日韓共同宣言を機に始まった韓国高校生訪日団での学校訪問時（2001年10月、京都府立洛西高校）の交流の様子

公益財団法人 日韓文化交流基金
〒101-0061　東京都千代田区神田三崎町2丁目21-2 ユニゾ水道橋ビル5F
tel. 03-6261-6790 / fax. 03-6261-6780

広がりを見せる青少年交流事業―
学校訪問で全国にまかれた交流の種が、芽を出しています。

学校訪問がきっかけとなり、日本と韓国の学校間での交流に発展することも少なくありません。今号では、交流の事例について、交流を行っている3校の学校関係者にインタビューを行いました。

●神奈川県立弥栄（やえい）高等学校と東灘（トンタン）中央高等学校の交流

インタビュー回答者　弥栄高校　坂本　万里校長
同校国際科2年　渡邊　琳さん

【姉妹校交流の開始】

2016年秋、東灘中央高校側が神奈川県内の学校との姉妹校交流を希望しているとの話しが（公財）国際文化フォーラムを通じてあり、両校の間で姉妹校交流に関する内容が検討されました。2017年10月に日韓文化交流基金の企画競争公募事業にあわせて実施された韓国高等学校校長訪問団一行が弥栄高校を訪れましたが、団員として東灘中央高校のチェ・スンホ校長も来日しており、両校の間で、「教育交流関係の成立に関する協定書」が結ばれ、正式に姉妹校交流が始まりました。

実際の交流は、東灘中央高生10名が昨年10月に5日間の日程で来日し、学校生活体験やホームステイを行いました。さらに今年の3月下旬には、弥栄高生10名が5日間の日程で東灘中央高を訪れ、交流を行う予定です。

【前任校2か所でも姉妹校締結を実現。締結のカギは3拍子】

弥栄高校に校長として赴任する前の前任校2か所においても、国際理解教育に重点を置いており、それぞれ韓国の高校との間で姉妹校締結を実現しました。姉妹校締結に至るためのポイントは、「校長、教員、生徒の三者の足並みがきちんと揃うこと」であると思います。姉妹校交流を続けていくのは、大変なこともありますが、弥栄高校の国際理解教育に期待して本校に入学してくる生徒もいるので、弥栄西高校の時代から30年以上続く伝統をこれからも大切にしていきたいです。

弥栄高校は国際科の他にも、芸術科や理数科など専門学科が設けられているのが特徴で、これまでにも「アジア国際子ども映画祭参加訪日団」として韓国の高校生が学校を訪れ、芸術科映像専攻の授業に参加して交流を図ったりした他、教育現場視察を目的とした韓国教員訪日団の皆さんが視察に訪れました。

【韓国訪問に向けて】

3月下旬の訪韓に参加する渡邊琳さん（国際科2年）は、「韓国の人たちはとてもフレンドリーで、韓国文化にも触れられるのが楽しみです。弥栄高校のことをもっと知ってもらいたいので、学校紹介のビデオ映像に韓国語の説明をつけて一生懸命に準備しています」と元気に語ってくれました。

3月の韓国訪問に参加する弥栄高生たち。写真右から2番目が渡邊さん。

●山形県・羽黒（はぐろ）高等学校と郷一（ヒャンイル）高等学校の交流

インタビュー回答者：羽黒高校　英語科教諭　粕谷優美子　さん

【教員訪韓団で訪問した高校でのこと】

2017年9月、全国から集まった小中高教員14名で構成される教員訪韓団の一員として韓国を訪問しました。日程中に京畿道華城市にある郷一高校を視察のため訪問した際、郷一高校が姉妹校として交流できる学校を探しているとの話しを聞きました。私の勤務先の学校でも、日本と時差の少ない国の高校と新たな姉妹校提携を考えていたこともあり、韓国滞在中から郷一高校の日本語教員と連絡を取り合い、両校で交流をしていく約束をしました。

【交流ツールとしてインターネット電話・スカイプを利用】

訪韓団からの帰国後、実際の交流の手段を検討する中で、以前アメリカの学校とインターネット電話サービスのスカイプを利用して交流をした経験もあったことから、今回もスカイプを使って交流することになりました。校内のパソコンを使い、羽黒高校からは英会話部の生徒、郷一高校は日本語履修の生徒とで交流が始まりました。

昨年10月下旬に、第1回目の交流が行われ、当初は教員同士によるスカイプの動作状況のテストのみの予定でしたが、両校とも興味を持った生徒たちが集まったため、お互いに簡単な自己紹介をし

て交流がスタートしました。

11月上旬には第2回目の交流が行われてからは、SNS上でのIDなどを交換しお互いに写真を見たり、メッセージを送り合うなどの個別の交流も始まりました。12月中旬の第3回目は「韓国の食文化」をテーマに、郷一高校の生徒たちが日本語で好きな韓国料理を紹介してくれました。羽黒高校の生徒たちも好きな食べ物を紹介した他、クリスマスの過ごし方や、クリスマスに特別に食べる物があるのかなども話しました。

【交流に参加した生徒の関心は英語圏から韓国へ】

羽黒高校では、英語圏に興味がある生徒が多かったのですが、交流を通して、韓国の同年代と触れ合うことで、韓国をより身近に感じ、韓国語を学び始める生徒も見られるようになりました。また、郷一高校の生徒の日本語のレベルも高く、日本の大学についても調べ、日本の学校への進学や留学を志している生徒もいることにも驚かされました。

交流に参加した生徒たちはSNS上で繋がり、一対一でスカイプよりも深い話ができ、日本との共通点や相違点を知ることができたようです。同年代同士で実際に交流し、話すことにより多くのものを得ているように感じました。

今回の交流は本校の英会話部のみでしたが、時間を合わせて国際コースの授業での交流も考えていきたいです。そして、将来的には交換留学プログラムも視野に入れていきたいと思います。

スカイプを使って郷一高の生徒とのやりとりをする羽黒高生たち

●熊本県立宇土(うと)高等学校と盆唐(ブンダン)中央高等学校の交流

インタビュー回答者：宇土高校　研究開発部長 教諭　梶尾滝宏　さん

【理系人材育成の視点での連携を目指して】

交流を考えたきっかけは、2014年2月に日韓文化交流基金主催の韓国高校生訪日団一行が本校を訪れたことです。訪日団の引率として来日していた教育関係者に交流について相談したところ、理系分野の人材育成の視点で連携をお願いできそうな学校として京畿道にある盆唐中央高校を紹介していただきました。

本校では2012年に学校独自のプログラムとして、グローバルリーダー育成プロジェクト（GLP）を立ち上げました。さらに、2013年度に文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けたこともあり、一気にグローバルリーダー育成と科学技術人材育成を強く押し進めることになり、その中で海外と連携できる高校や大学を模索していたところでした。

【困難を乗り越えて】

2014年4月当初にメールで盆唐中央高校に連絡を取り、連携をすすめていくための話し合いをもつ予定でしたが、韓国でセウォル号の沈没事故があり、哀悼の意を込めて見送ることとなりました。2015年4月に再度連絡したところ、盆唐中央高校には課題研究発表会があることを知り、同年10月下旬に開催される発表会に宇土高校のSSコースの生徒6名が参加して、江戸時代から宇土の人々を潤してきた轟泉（ごうせん）水道をテーマに研究した内容や音の響きによる超常現象、反発係数などを取り上げた研究を英語で発表しました。

発表会までの準備期間には、盆唐中央高校とテレビ会議システムを利用して情報交換しながら、現地の高校生と英語で研究内容について意見交換しました。発表会から帰国した後もテレビ会議を通じて交流も行い、単年で終わらずその後も続けて両校で連携していくことになりました。

2016年度も同様の日程、人数で参加し、両校の交流はさらに深まりました。宇土高校でも人気の高い交流プログラムとなり、2017年度も前年と同規模の10名で実施する計画を進めていました。しかし東アジア地域をめぐる世界情勢の不安から、残念ながら今年度は中止となってしまいました。

【これからも学校独自のプログラムとして】

開始当初は、交流と簡単にいっても、何をすれば深まるのか、どうしたらよいか、不安もありましたが、お互いに研究発表できる材料があるということで、一気に生徒同士も仲良くなったような気がします。交流参加した女子生徒（2年）は、「韓国の生徒の積極性とパワフルさが一番印象に残りました。一人ひとりが自分の発言に自信を持っていて、鋭い質問にも自分が答えたいとマイクを取り合うほどでした」と興奮気味に話してくれました。最近では、理系コースの生徒だけでなく、文系の生徒も応募してくれるようになり、本校にとっても貴重な機会と捉えています。実施については様々な意見がありますが、生徒が韓国に行って発表したいという背中を後押ししてくれる保護者も増えているのも事実です。

盆唐中央高校の授業に参加して一緒に実験を行いながら交流する宇土高生
(写真中央の女子生徒)

相互理解に向けた日本語教育と交流活動のこれから

●文化交流の活性化が友好関係に寄与

現在、韓国と日本の交流は政治、経済、社会、文化などすべての分野において拡大しています。日本は韓国の隣国という地政学的関係によって、日韓両国の交流の歴史は極めて長いものがあります。

特に今日のように、各地域を単位とした、政治経済的統合が広がりを見せる時代には、北東アジア地域国家として、政治経済のみならず、文化交流を活性化することで、お互いの文化についての理解が進み、両国の友好関係に大きく寄与することであろうと思います。しかし現在、日韓両国の関係が政治的に疎かになるにつれて、韓国における日本語への関心も少し薄くなっただけでなく、日本語教育の中学校、高校での第二外国語※科目としての地位が中国語に押されて、大いに弱くなってきている現実があります。

梅香女子情報高校と姉妹関係にある、長野県諏訪実業高校を訪問し、伽耶琴の演奏を披露

●中等教育における現状

中学、高校の教員の採用試験において、日本語担当教員は、2000年代初めには、京畿道だけでも100名を採用した好況な時期もありましたが、その後はほとんど採用試験が行われず、2014年には韓国全土において9名（江原道2名、慶尚南道3名、忠清南道4名）という人数で策定され、日本語教員採用試験が行われました。まさに第二外国語の需要は増減が変化し、安定的でないことが教員採用試験にも現れています。

これは当時、日本語が学生たちに人気の第二外国語であったのと、それにより日本語教員の需要が増えたことで、教員を多数採用したのですが、現在は需要が減ったことで、むしろ人員が過剰となり、日本語教員の採用を数年間行わなかったり、すでに正規教員となっているものが順番で授業を受け持ったり、他の教科に移ったりという状況になりました。

そのような反面、中国語は生徒たちの需要よりはむしろ、保護者たちの希望によって、中国語を選択する傾向が増し、それによって年々中国語教員の採用が増えている現状があります。

しかし、これも時代の流れによるので、数年後には日本語と同じような状況になるのではないかと心配しています。

諏訪実業高校商業科の教員と一緒に実施した公開授業で、梅香女子情報高と諏訪実業高の生徒が一緒に授業を受ける様子

●日本語教育と交流活動のこれから

日本語の授業を設けている学校では、授業だけでなく、日本の学校との交流や校内クラブ活動などで日本文化を経験する機会を増やし、生徒たちが自ら関心分野に積極的に参加できるように、多様な機会を提供することを目指しています。

また、在韓日本大使館公報文化院などが主催している、日韓交流おまつりinソウルや、クールジャパンリポーター、アジア国際子ども映画祭のほか、韓国日本語教育研究会が実施している、日本語スピーチ大会、演劇大会などの日本語関連の行事を通して、日本語への関心を拡げていくことも良い方法であると考えます。

言語と文化が調和し、日韓両国が良い関係となることでつながりが増し、両国の民間レベルでの交流が活性化されていくことを望みます。

交流活動では日本社会の見聞を広める目的で日本銀行なども見学しました。

※韓国では、2011年の中等教育の教育課程改定により必修科目から選択科目に変わり、第二外国語の選択科目として、8教科（ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、日本語、ロシア語、アラビア語、ベトナム語）が設けられています。

PROFILE

朴 幸子（パク・ヘンジャ）

1991年より2012年2月まで、韓国・梅香女子情報高校の日本語科教員として在籍。2012年3月より同校の首席教師（現職）を務める。
韓国日本語教育研究会会長や京畿道教育庁教育課程改訂に関する先導委員などを歴任。2017年11月実施のアジア国際子ども映画祭参加訪日団では引率を務めるなど青少年交流事業にも携わる。

第17回日韓歴史家会議「東アジアの平和思想とその実践―歴史的考察」

2017年11月17日から19日までの3日間、東北亜歴史財団（ソウル）にて、17回目となる日韓歴史家会議が開催されました。

*この会議は、2001年に日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」として発足しました。日本史、韓国史のみならず、幅広い分野の歴史研究者が年1回の会議に参加し、最新の歴史研究の成果をもとに意見交換と討論を行っています。

今回は「東アジアの平和思想とその実践―歴史的考察」と題し、日本側からは12名、韓国側からは14名の専門家が参加しました。

初日の記念講演では、ソウル大学名誉教授の李泰鎭（イ・テジン）氏の「植民主義歴史観、その通説と通論に対する挑戦」と、東京大学名誉教授の石上英一氏の「史料編纂者としての歩み」と題する講演が行われました。2日目は「東アジア平和思想の起源と系譜」、「アジア主義とアジア連帯論」、「反戦平和運動とその意味」の各セッションにおいて、報告と討論が、最終日には総合討論が行われました。

日　程

■11月17日（金）

日韓歴史家会議開催記念講演会「歴史家の誕生」

〈司 会〉金榮漢（キム・ヨンハン：西江大）

韓 国「植民主義歴史観、その通説と通論に対する挑戦」
李泰鎭（イ・テジン：ソウル大 名誉教授）

日 本「史料編纂者としての歩み」石上英一（東京大名誉教授）

■11月18日（土）

【第1セッション 東アジア平和思想の起源と系譜】

〈司 会〉李鍾国（イ・ジョングク：東北亜歴史財団）

〈報 告〉

韓 国「21世紀 朝鮮半島発平和論の摸索」
朴明圭（パク・ミョンギュ：ソウル大）

日 本「20世紀における平和思想の系譜と日本」
小菅信子（山梨学院大）

〈指定討論〉

日 本 網谷龍介（津田塾大）

韓 国 金鍾学（キム・ジョンハク:東北亜歴史財団）

【第2セッション　アジア主義とアジア連帯論】

〈司 会〉崔徳洙（チェ・ドクス：高麗大）

〈報 告〉

韓 国「近現代中国のアジア認識とアジア主義」
裵京漢（ペ・ギョンハン: 新羅大）

日 本「東アジアの戦争とアジア主義：『大東亜戦争』へ向かう日本の対中国政策と対英国政策を中心に」
松浦正孝（立教大）

〈指定討論〉

日 本 米谷匡史（東京外国語大）

韓 国 南相虎（ナム・サンホ：京畿大）

【第3セッション 反戦平和運動とその意味】

〈司会〉崔徳洙（チェ・ドクス：高麗大）

〈発表〉

韓 国「戦時期日本社会主義運動と平和空間-日本共産党の反戦活動と佐野学の転向を中心に-」
鄭惠善（チョン・ヘソン: 成均館大）

日 本「反戦平和運動の挫折から仏独歴史和解へ：歴史認識問題解決のヒントを求めて」
剣持久木（静岡県立大）

〈指定討論〉

日 本 恒木健太郎（専修大）

韓 国 朴相昱（パク・サンウク：東義大）

■11月19日（日）

【第4セッション　総合討論】

〈司 会〉李永石（イ・ヨンソク：光州大）

〈総合討論〉

参　加　者

【参加者】敬称略　日本側（五十音順）

網谷　龍介	津田塾大学	現代ヨーロッパ政治・政治史
石上　英一	東京大学	日本古代史・奄美諸島史
小澤　弘明	千葉大学	中東欧近現代史
小田中直樹	東北大学	フランス社会経済史、歴史関連諸科学
木畑　洋一	東京大学／成城大学	国際関係史
剣持　久木	静岡県立大学	フランス現代史、歴史認識
小菅　信子	山梨学院大学	日本近現代史・国際関係論
須田　　努	明治大学	日本近世史・近代史
恒木健太郎	専修大学	経済学史・思想史
松浦　正孝	立教大学	日本政治史
宮嶋　博史	成均館大学校	朝鮮史
米谷　匡史	東京外国語大学	社会思想史・日本思想史

韓国側（カナダラ順）

金 榮 漢	西江大学校	西洋思想史
金 鍾 學	東北亜歴史財団	近代韓日関係史
金 浩 東	ソウル大学校	中央アジア史
南 相 虎	京畿大学校	日本近現代史
朴 明 圭	ソウル大学校	歴史社会学
朴 相 昱	東義大学校	ドイツ現代史
裵 京 漢	新羅大学校	中国現代史（政治・思想史）
呉 定 燮	韓国歴史研究院	韓国史（朝鮮時代史）
李 鍾 国	東北亜歴史財団	近現代韓日関係
李 永 石	光州大学校	英国史
李 泰 鎭	ソウル大学校	韓国近世近代史
鄭 惠 善	成均館大学校	日本近現代史
車 河 淳	西江大学校	西洋思想史
崔 德 洙	高麗大学校	韓国近現代史

「空飛ぶ車いす」千台を繋いだ人と人―ついに青瓦台も

神奈川工科大学車いす修理屋（代表　武藤英里　2年）は2018年1月初め、日韓合同アジア支援―空飛ぶ車いす交流の継承と題し、これまでに寄贈した車いすの整備と新たに国内の4校（世田谷泉高校、神戸科学技術高校、新津工業高校、新居浜工業高校）が整備した車いす28台を子どもたちにプレゼントするために釜山に向かいました。

この活動は1999年から始まり、航空会社の協力も得て、これまでに千台が空を飛び、子どもたちへ届けられています。

■韓国での活動を通して

1月5日、釜山障害者総合福祉館で10台の車いすの整備を行い、翌6日には車いすを待つボヒョン保育園など訪ねて、日本から持参したお菓子で子どもたちと交流しました。

福祉館での整備を終えた後、同館のハ・ソヨン館長は「韓国で車いすは5年に1回の支給となっており、途中で不具合が発生しても再支給がないため、子供たちの背が伸びる頃は車いすの支給申請を見送り、重くて抱っこ出来なくなる頃を待って申請する。その結果必要でも使えない子は多いのです。空飛ぶ車いすは当館の冬の風物詩になっています」と、活動の継続に期待を寄せていました。

小児用車いす5台を受け取ったボヒョン保育園の金チナ園監は「贈ってもらった車いすは体に合い、安心して通学できる」と大喜びでした。

活動に参加した渡邉菜都記さん（1年）は「車いすを使えない現状を忘れないためにも続けたい」と意欲を見せ、林美希さん（1年）は「韓国の方々の丁寧で優しい応対に温かい気持ちになった」と感想を述べていました。

■助成制度が育んだ日韓ボランティア交流

2001年から車いす持参で訪韓した高校、大学は、秋田、岩手、栃木、東京、神奈川、新潟、愛媛、福岡の15校に及びます。2003、2005年は日韓文化交流基金の助成事業によって、日本から寄贈した車いすを使う、スミちゃん（12歳）やイノ君（10歳）らの家族を招いて、高校生との交流も楽しみました。

その交流の成果はさらに、タイとスリランカでの日韓合同アジア支援活動につながりました。

この合同支援に携わった両国の渡航者は300人を超え、韓国には丁水慶さんや朴周媛さんのように高校時代から15年続けて参加する人や3歳から参加した子どもが大学生になった今も参加する親子二代のボランティアもいます。

■日本の体験を若者に

これまで19年間無事故で活動できたのは、全国社会福祉協議会（日本）の福祉研修に一緒に参加した、趙榮倫さん、李光文さん（韓国）、アリーさん（スリランカ）、サイワルーンさん（タイ）たちと彼女らにボランティアで日本語を教えた上田尚子先生との20数年来の交流があったからです。

習いたての日本語で行う現場研修は、言葉以外に職場の人間関係に悩んだりします。上田先生はその都度、彼女たちの話を聞き、手料理でもてなし励ましてくれたのです。そして彼女らは恩師を見習い、活動に参加する学生たちにご飯は美味しい?体調は?と気遣う言葉をかけたり、集合時間に遅れる学生には叱ったり、ある時は日本で失敗を経験した話などで笑わせたりなどして活動を見守ってくれています。

海外活動で緊張する学生たちは、母のような叱咤激励の中で無事活動を終えることが出来たのだと思います。

■青瓦台への訴えが届く

実は1月の訪韓の際、車いす28台は釜山税関で「医療機器」輸入関税請求のため、一時留保となりました。こちらから「18年間非課税」の対象になっているとの説明にも「課税する」の一点張りでしたが、釜山障害者総合福祉館の金旻宣さんが韓国大統領府（青瓦台）「国民の声」に、「空飛ぶ車いすは18年間で千人に寄付してきており、韓国の障害児に必要である」と書き込んだのです。そして翌週の1月中旬に、青瓦台からは関税法第81条によって「寄付は免税」規定あり、と回答がありました。そして、当初の予定から3週間遅れて車いすは韓国に入国し、日本側ボランティアの梅原直人さん（大学院2年）が2月初めに再度訪韓して、釜山の子どもたちに手渡すことができました。

お父さんと一緒にきてくれたオ・アンナちゃん（4歳）の車いすを調整する金旻宣さん（左から2人目）と梅原さん（左）

PROFILE

佐々木 俊一（ささき しゅんいち）

1999年、空飛ぶ車いす第一号をソウルに届けた。以来、台湾、フィリピン、ベトナム、インドネシア、マレーシア、タイ、スリランカの活動に輸送ボランティアとして参加。ノンフィクション童話『空飛ぶ車いす―心がつながるおくりもの』井上夕香著（素朴社、2008年）編集協力。

東京都市大学と韓国・江原大学校との研究・文化における国際交流

韓国ー日本（江原大学校［Kangwon National University: KNU］ー東京都市大学［Tokyo City University: TCU］）間のさらなる国際共同研究の推進、並びに本学学生の国際的視野と感覚を育成させるための文化交流を目的とした、「江原大学校ー東京都市大学プラズマライフサイエンスに関する国際ワークショップ（2017　KNU-TCU International Workshop on Plasma Life-Science）」、並びに文化交流を12月12日～ 12月20日の8泊9日の日程にて行いました。

国際ワークショップ

科学技術の飛躍的な進歩と政治・経済・社会・文化等の大きな構造変動に起因した価値観の多様化と流動化が進行し、学問・研究分野の定義が大きく変革しつつある革新的複合領域研究の一端を、「国際交流」という形態にて体験させてグローバルな視点を育成させるのみならず、韓国・日本の学生を対象とした次世代若手企業人及び研究者の国際的人材育成と輩出の促進に貢献できるような国際ワークショップを実施しました。

ナノマテリアルに関して講師の先生による講演、プラズマに関するチュートリアル講演、両大学の学生における研究へのモチベーションの向上を促すためのプレゼンテーション及びスチューデント・ディスカッション（ポスター発表・研究別フリーディスカッション）、3Dプリンターによる物作り講習及び実習体験を行いました。

さらに、両大学の学生による研究発表・討論会を行いました。初めて発表する学生もいましたが、各自かなり健闘したと思います。やはり、場数を踏むことがとても大事です。本学の学生には良い経験になったと思います。夕食はKNUの学生と共に食べ、楽しい一時を過ごしてホテルに戻りました。

国際ワークショップ

文化体験・交流

文化体験を行いました。マックッス(蕎麦冷麺：手でこねた蕎麦生地をところてんのように押し出した物をそのままお湯に入れるスタイルで茹でるというユニークな方法)作りとその試食を体験しました。また、文化芸術大学にて韓国の民族衣装の試着と伝統舞踊の体験を行い、韓流時代劇に出てくる王様と王妃、楽隊などの衣装を試着して学生はかなり楽しんでいました。さらに、春川市における代表的な観光スポットである昭陽湖・昭陽ダム（ソヤンホ・ソヤンダム）の散策、「冬のソナタ」のロケ地として有名な南怡島(ナミソム)・ナミナラ共和国など、韓国の多様な文化を体験・堪能しました。

民族衣装の試着と伝統舞踊体験

ナミナラ共和国のメタセコイア並木にて

韓国滞在最後の日には、今回の成果報告会とお別れパーティーを行いました。KNUの学生も多く参加してのパーティーは、大盛況でした。以前に本学に招へいした学生も参加してくれたので、さらに盛り上がりました。我々の友情は国を超えたものがあり、これからもこのような取り組みを継続して行うことが大変重要であると感じています。

PROFILE

平田 孝道（ひらた　たかみち）

1965年生まれ。東京都市大学工学部医用工学科教授。研究・専門テーマは、カーボンナノチューブを用いたナノバイオセンサの開発研究、並びに大気圧プラズマを用いた火傷・創傷治癒及び脳・肺・心臓の疾患治療に従事。

フェロー
研究紹介

「中堅企業の成長と戦略に関する日韓比較」

韓国・培材大学校日本学科 教授　**姜 喆 九**

フェロー研究紹介のページでは、各分野の日本研究、韓国研究をされている若手研究者による様々な見解や研究結果をご紹介しています。今号では、2016年度に訪日フェローとして研究された姜喆九氏の研究内容についてご紹介します。

1．提起の出発点

2016年の夏休み、日韓文化交流基金フェローシップのおかげで私は日本に滞在することができた。2004年に学位を取って帰国してから12年目である。東京で過ごした３ヶ月の間に、私は日韓における中堅企業の成長と戦略を比較する研究を行った。それは、韓国では中堅企業の成長環境の基盤が整っていないためであり、また日本における中堅企業の成長と戦略の背景を研究すれば、韓国になんらかのインプリケーションが得られるのではないかと思ったからである。実際に韓国の経済環境では、少数の大手企業と多数の中小企業に分かれている産業構造が問題になっており、その原因の一つとして偏った韓国の企業政策、つまり、中小企業には保護政策を、大手企業には規制政策をとることが挙げられる。一方、日本では中堅企業に対する法律的定義は存在しない代わりに、産業化の長い歴史と多様な中小企業支援制度などを通して中小企業→中堅企業→大手企業と成長していけるような環境がすでに整っており、特に中堅企業は豊かな国内産業と大手企業との協力関係があり、また独自の技術を武器に世界的な競争力を持つ企業が多数存在している。これらを研究の背景にして、日韓両国における中堅企業の成長と戦略を比較することで、日本から学ぶべきところから韓国の中堅企業に活用できるインプリケーションが得られると考えた次第である。

2．日韓中堅企業の定義と認識

韓国で中堅企業という用語は1980年代後半から使われ始めたが、厳密には法律的な根拠がない状態であった。しかし、1980年代後半になってから韓国では経済両極化（中小企業対大手企業）に直面したのであり、この問題を解決するためには大手企業と中小企業の間に中堅企業という一つの段階が必要であるという認識が広がったのである。その後、2011年３月10日に国会本会議による「産業発展法」改正案によって中堅企業の法律的定義が決められた。しかし、中堅企業の定義が法律で制定されたとしても、それによって中堅企業の重要性に対する社会的認識が拡散したという意味ではない。すなわち、法律的定義とは別にして中堅企業は中小企業に付与される政府の支援を受けることができず、また大手企業のような知名度もないことから、新卒の学生を求めることや資金調達の面からも苦難に直面しているのは未だに変わりはない。

そこには様々な理由があるが、まずは、韓国政府の企業政策に問題があった。即ち、保護を主とする中小企業政策（保護主義政策）と規制を主とする大手企業政策（規制主義政策）に二分されていて、中堅企業はその立場が曖昧模糊であるものの、一方で大手企業と同一水準の規制を受けるので、結局中堅企業でありながら大手企業との闘いになる。これでは競争にならない。このような事情から一部の中堅企業では、企業を大きく成長させるための投資を拡大したことや、従業員を増やして成長したことを後悔することさえある。

この矛盾を克服するために、一部の中堅企業は法律的には中堅企業になったにもかかわらず、子会社を設立したり、企業を分社したりするなどの方法を使って中小企業の地位を維持しようとする事例が生じる。韓国ではこのように中小企業自ら規模を縮小する現象をピーター・パン症候群（Peter Pan Syndrome）と呼ぶ。

それでは日本の中堅企業の定義と認識はどうであろうか。日本は韓国と違って、今日に至るまで中堅企業に対する法律的定義は定まっていないため、中堅企業に対する政府からの支援政策があるわけはない。しかし、日本における中堅企業は次の三つの特徴を持っている。第一に、独自の技術力を持ち、ニッチマーケット（niche market）を攻略する。第二に、世界的な競争力を持つ。第三に、中層的な分業構造を通した成長戦略を持つ、という特徴である。

一方、日本での中堅企業に対する認識は、地方での影響力を持つ企業、地域住民に対する雇用創出と所得の機会を提供する企業という認識がある。また、その地域の経済と相互依存しあい、中堅企業として成長した後も引き続き地域に貢献するというポジティブなイメージがある。

3．日韓中堅企業の成長と戦略

日本では1990年代に至るまで製造業が国際舞台での競

〈表1〉日本中堅企業の世界市場での成功要因

要　素	内　容
核心技術確保戦略	少数の核心技術を長期間育成し、差別化水準を高める
グローバルニッチ戦略	小規模市場で世界一位になり、市場をリードする
垂直水平統合戦略	競争力強化のための力を内在化する
集約型多角化戦略	核心技術を多様な産業・顧客に適用しながら成長する
日本式ベンチャー文化創出	長期的研究風土と競争的企業文化を並行して創出する

争力を持ち、また重要な役割を担当してきたといえる。このような背景から日本の中堅企業は圧倒的な技術力を基礎に専門分野において世界一を達成した後、他の顧客、他の産業にビジネス領域を速やかに拡張するタイプを見せてきた。2000年以降、日本政府は中堅企業を育成するため、地方自治体や商工会議所と共に国際化支援事業、貿易投資相談、海外事業計画と立案、現地調査、コンサルティングなど、多様な制度を支援してきた。

代表的な例を挙げると、2008年、自民党政権当時に「経済情勢激変に対する緊急対策」を通して、中小企業を対象に30兆円の緊急保証などの金融対策、下請け取引の適正化、税制対策などを柱にする対応策を取り入れたことがある。また、2013年に入ってからは、高い世界シェアを持ち、優れた経営を行っている中堅・中小企業を「グローバルニッチトップ」（GNT：Global Niche Top）と名付け、100社を選定し、積極的な政府支援をすることにした。これは中堅企業の重要性を強調する制度であるともいえる。

このような日本の企業政策は韓国においてよいモデルになるのであろう。韓国政府は、2014年７月、これまでとは異なり、韓国経済が成長するためには必ず中堅企業が必要であるという認識を共有し、世界的な専門企業を育成するため、「中堅企業成長促進及び競争力強化に関する特別法」（中堅企業法）を制定した。そして、2020年までに優秀な中堅企業300社を育成する「World-Class 300」プロジェクトを始めた。選定された企業に対しては最大10年間、金融と行政支援が受けられる。進行中であるこのプロジェクトが成功し、韓国でも世界的な中堅企業が誕生することを期待したい。

4．インプリケーション

韓国の場合、中小企業に対する過度な支援は、むしろ中堅企業に成長しようとする自発的な意志をなくすことになるため、中小企業の支援に上限を設ける制度を実施しようと主張する学者もいる。少数の大手企業の成果に国家経済全体が左右される経済体質を持っている韓国経済においては、日本のケースが羨ましいかもしれない。つまり、独自の技術力と対内・対外環境の変化に揺さぶられることのない競争力を持つ環境がそれである。日本の中堅企業が成長した背景には、日本政府の支援策や環境というよりは、独自の技術力を背景に国内外を舞台に広範囲に渡って挑戦し、価格決定権を持ち、資本的にも独立することができた企業があるからである。また、韓国の中堅企業に対する社会的な無関心も深刻な問題である。多くの大卒者は大手企業や安定した公務員を選好するため、中堅企業の人材確保はかなり難しい。韓国では2015年７月22日「中堅企業人の日」を制定し、毎年それを記念しているのがせめてもの幸いではある。

結論としては、中堅企業に対する韓国社会の認識不足やイメージ改善などは別として、なによりも中堅企業自らが技術力ある専門企業になろうという意志と、旺盛な起業家精神を発揮することを優先しなければならない。また、法律的定義や政府からの支援制度の存在有無などの状況によって企業の成長が左右されるのではなく、企業が持続的に成長しようとする意志と起業家精神、そして独自の競争力を持つことがなによりも重要であるといえよう。

PROFILE

姜喆九（カン・チョルグ）

1967年、韓国天安生まれ。明治大学商学研究科（博士課程）修了（商学博士）。2004年、ソウル大学校行政研究所先任研究員、高麗大学校経済学部研究教授を経て、現在培材大学校日本学科教授。著書に『日本経済悩まず読もう』など。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2017年度第3四半期（2017年10月1日から12月31日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	計	男	女	期　間	主な訪問先
韓国青少年訪日団（第1団、第2団）	100	43	57	10/12～10/18	長野県飯田市内学校訪問（長野県飯田OIDE長姫高等学校、飯田市立竜東中学校）、山梨県（都留市、北杜市、南都留郡富士河口湖町）、長野県（飯田市、木曽郡南木曽町）、岐阜県（中津川市、各務原市）、滋賀県（彦根市）、京都府（宇治市）
韓国青少年訪日団（第3団、第4団）	100	37	63	11/9～11/15	岐阜県池田町内学校訪問（岐阜県立池田高等学校、岐阜県池田町立池田中学校）、石川県（金沢市）、岐阜県（大野郡白川村、高山市、郡上市、揖斐郡池田町、各務原市）、滋賀県（彦根市）、京都府（宇治市）
アジア国際子ども映画祭参加訪日団	10	2	8	11/22～11/28	北海道留辺蘂高等学校、神奈川県立弥栄高等学校、北海道（北見市、網走市）、神奈川県（相模原市）

韓国青少年訪日団（第1団、第2団）
ホームステイファミリーとのお別れ（長野県飯田市）

韓国青少年訪日団（第1団、第2団）
五平餅作り体験（長野県飯田市）

韓国青少年訪日団（第3団、第4団）
学校訪問中に折り鶴体験（岐阜県池田町）

韓国青少年訪日団（第3団、第4団）
同年代の皆さんと郡上踊り体験（岐阜県郡上市）

アジア国際子ども映画祭参加訪日団
学校訪問中にけん玉を体験（北海道北見市）

アジア国際子ども映画祭参加訪日団
カーリングを体験（北海道北見市）

訪韓団

団体名	計	男	女	期　間	主な訪問先
日本青少年訪韓団 （第1団、第2団）	99	16	83	10/22～10/28	公州大学校、ソウル特別市、京畿道（城南市、華城市、龍仁市、水原市）、忠清南道（公州市）
日本青少年訪韓団 （第3団、第4団	100	34	66	11/5～11/11	晋州教育大学校、ソウル特別市、京畿道（坡州市、城南市、華城市、龍仁市、水原市）、忠清南道（公州市、扶餘市）、全羅北道（全州市）、慶尚南道（晋州市）、釜山広域市

日本青少年訪韓団（第1団、第2団）
水原華城行宮見学

日本青少年訪韓団（第1団、第2団）
学校訪問中にテコンドーを体験

日本青少年訪韓団（第1団、第2団）
学校訪問中に日本の魅力を紹介

日本青少年訪韓団（第3団、第4団）
学校訪問中に日本の魅力を紹介

日本青少年訪韓団（第3団、第4団）
学校訪問でソーラン節を披露

日本青少年訪韓団（第3団、第4団）
韓国舞踊体験

2 学術定期刊行物助成

- 『韓国朝鮮の文化と社会 第16号』（韓国・朝鮮文化研究会編、株式会社風響社）
- 『現代韓国朝鮮研究 第17号』（現代韓国朝鮮学会編、中西印刷株式会社）

町名変更に伴う住所の変更について

このたび、当基金が所在する千代田区三崎町において町名変更が行われました。それに伴い、平成30（2018）年1月1日より住所が下記の通り変更となりましたのでお知らせいたします。

▶平成29年12月31日まで

〒101-0061
東京都千代田区三崎町2-21-2　ユニゾ水道橋ビル5F

▶平成30年1月1日以降

〒101-0061
東京都千代田区神田三崎町2-21-2　ユニゾ水道橋ビル5F

※郵便番号及び丁目・番・号の変更はありません。

日韓文化交流基金　賛助会員制度の御案内

日韓文化交流基金は1983年の創立以来、両国国民間の相互理解と信頼を深めるため、青少年交流をはじめ数多くの事業を実施しております。

こうした活動のために、当基金では賛助会員制度を設け、趣旨に御賛同頂ける多くの方々の御支援を賜りながら、さらなる事業活性化を図っていく所存でございます。

賛助会員の皆様には特典といたしまして、広報誌『日韓文化交流基金NEWS』（季刊）及び、当基金が実施する講演会をはじめとする各種催しの参加案内をお送りいたします。また、日韓文化交流に関するニュースやお知らせなどを、メールマガジンでお届けいたします。

皆さまのご入会を心よりお待ちしております。

■頂いた会費は講演会や助成事業などに使われます

会員の方々から頂いた会費は、当基金主催の講演会と学術定期刊行物に対する出版助成経費の一部に充当されています。該当事業につきましては年度毎に御報告いたします。

2017年度の講演会と助成事業について御紹介いたします。

〈講演会〉

2017年度講演会		
4月26日	「日韓文化の違いと近似性- 会議通訳の現場から」	長友英子 日韓会議通訳・放送通訳
10月25日	「北朝鮮人民の生活 -脱北者の手記から読み解く実相-」	伊藤亞人 東京大学名誉教授

〈助成事業〉

『韓国朝鮮の文化と社会 第16号』『現代韓国朝鮮研究 第17号』の2点に助成いたしました。

詳しくは本誌P11「日韓文化交流基金事業報告 2.学術定期刊行物助成」をご覧ください。

ご自身の韓国語との出会いから通訳時に気をつけていることや、通訳の事前準備の重要性についてお話くださった長友英子氏

講演後の懇談会風景。参加者からの質問に丁寧にお答えくださる伊藤亞人氏

■入会のご案内

●年会費

（1）個人会員　1万円　／（2）特別会員　3万円　／（3）法人会員　5万円

1口以上何口でもご加入になれます。会員期間は、会費の入金日から1年間です。

●年会費のお支払方法

（1）郵便振替	口座番号　00160-9-668460 口座名称　公益財団法人　日韓文化交流基金	（2）銀行振込 ※新たな支払方法	ゆうちょ銀行　〇〇八（ゼロゼロハチ）支店（普通） 口座番号　8505617 名義　公益財団法人 日韓文化交流基金 フリガナ　ザイ）ニッカンブンカコウリュウキキン

※手数料は当基金で負担いたします

➡お振込みと合わせて、当基金ウェブサイトの賛助会員制度のページに賛助会員制度申込みフォームがありますので、そちらに必要事項を御記入ください。

●お問い合わせ・資料のご請求

公益財団法人　日韓文化交流基金　〒101-0061　東京都千代田区神田三崎町2丁目21-2ユニゾ水道橋ビル5F
Tel 03-6261-6790 / Fax 03-6261-6780 / E-mail membership@jkcf.or.jp / ウェブサイトhttp://www.jkcf.or.jp

表紙写真紹介

タイトル：春を知らせる花「チョウセンレンギョウ」

（東京都薬用植物園にて、撮影：鬼海 裕之）

韓国では「개나리（ケナリ）」と呼ばれ、春の訪れを告げる花ともいわれています。
撮影した3月上旬はまだ、つぼみのものも多い中でしたが、咲いている花を見つけました。